

特別支援教育の視点を取り入れた「書き」の力を高めるための指導の在り方 —特別の教科「道徳」の実践を通して—

観音寺市立一ノ谷小学校
教諭 白澤 美穂

1 はじめに

近年、発達障害がある児童の割合は増加傾向にあり、子ども全体の6～7%にのぼると言われている。通常学級では、35人学級1クラスに平均2～3人ほど在籍していると推定されており、それぞれが学習面・生活面・コミュニケーション面などで、様々な課題を抱えている。発達障害がある全ての児童が、特別支援学級に在籍しているわけではなく、通常学級の集団の中で、一斉に同じ授業を受け、同じ課題に取り組んでいる場合も少なくない。特に、特別支援学級に在籍する児童も一緒に学習する機会の多い道徳科の授業について、一人ひとりが自分の考えをもち、その意見をワークシートなどに書き表すことの難しさについて、日々悩み、「授業の在り方を改善する必要がある」と切実に感じていた。その現状を踏まえ、本研究では、他者の感情を読み取ることの困難性、ワーキングメモリの弱さなど、様々な理由で「書き」に対し困難性が認められる児童に対し、特別支援教育の視点を取り入れながら、全ての児童が参加できる授業の在り方をめざし、研究を行ってきた。

2 実践の内容・方法

(1) 指導の実際

① ワーキングメモリの弱さへのアプローチ

右に示すワークシートは、研究がスタートする以前の児童のものである。A児は、ワーキングメモリが弱く、黒板の文字を1文字ずつ写していたことから、視写に非常に時間がかかっていた。A児の様子を観察すると、文字を単語で捉えてはおらず、1文字ずつ覚えては写す、という作業を繰り返していた。そのため、文字を書いている途中で、どの文字

を書き終えたかを忘れてしまい、再度、写し終わった文字を探す過程から始めなければいけない、という状況が見られた。そこで、児童の席を黒板の横にし、着目する対象（文字）との距離を縮めたことで、視点が定まりやすくなり、文字に着目しやすくなった。また、ICTを活用し、板書を写真で撮影し、児童の手元に置いた。写し終わった個所を見え消しすることで、写し終えた文字を記憶する必要がなくなり、形が認識しにくい文字を拡大して確かめながら学習できるようになり、文章を書くスピードが大きく向上した。さらに、児童が必要を感じた時に、自分の力でいつでもタブレットを使用できるよう、操作方法等の指導を行った。始めは、タブレットを使いながら書き写す場面もあったが、徐々に「書く」ことに慣れ、2～3か月後には、タブレットを使わずとも、自分の力で時間内に書き写せるほどにスピードが向上した。



【研究前のA児のワークシート】



【座席の配慮】

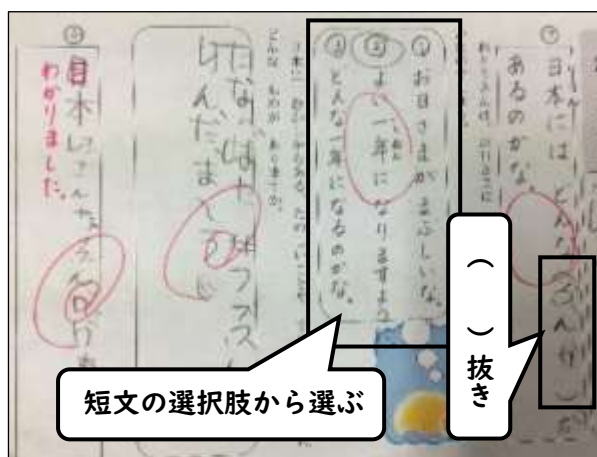


【タブレットで見え消しを行った様子】

② 自分の考えを文章化することへのアプローチ

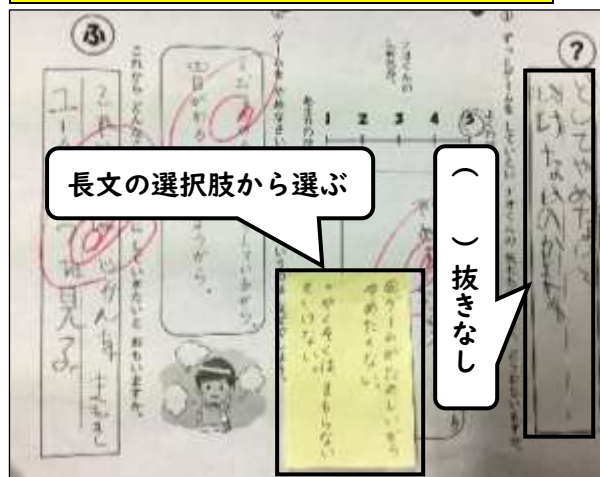
文を書くには、無数にある語の中から自分の書きたいことに合った語を選択し、その単語を並べ替え、構成し直していく必要がある。語彙が少ない児童やワーキングメモリが弱い児童にとっては、難しい過程であり、適切な支援がなければ自分の意見をワークシート上を書くことは非常に困難と言える。そこで、まずは、前向きに「書き」に取り組む姿勢を育成することを目的とした「ステップ1」からスタートし、徐々にステップアップし、最終的には、ワークシートの全ての設問で自分の意見を書くことができることを目標に、スモールステップを意識した学習活動を組み込むことにした。

ステップ1【短文の選択肢・（ ）抜き】



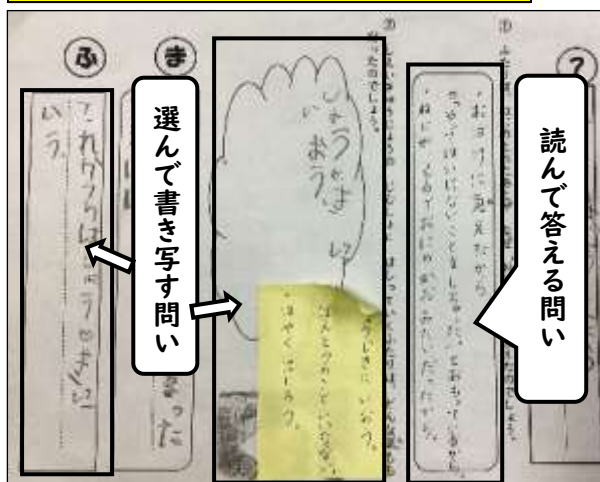
ステップ1では、ワークシートに短文の選択肢や（ ）抜きを設ける工夫を行った。これは「書き」への負担を軽減させ、まずは、前向きに課題に取り組む姿勢を育成することを狙いとしている。2～3語文程度の短文の選択肢を設けることで、読みへの負担を軽減させた。また、選択肢の中に、明らかな誤答を含ませておくことで、選択肢が消去され、自信をもって考えを選ぶように配慮をした。また、ステップ1の期間をゆったりともち、「意見をもつ」という経験を積み重ねていくことで、A児は、自ら考え、授業に参加することが習慣となっていた。

ステップ2【長文の選択肢・（ ）抜きなし】



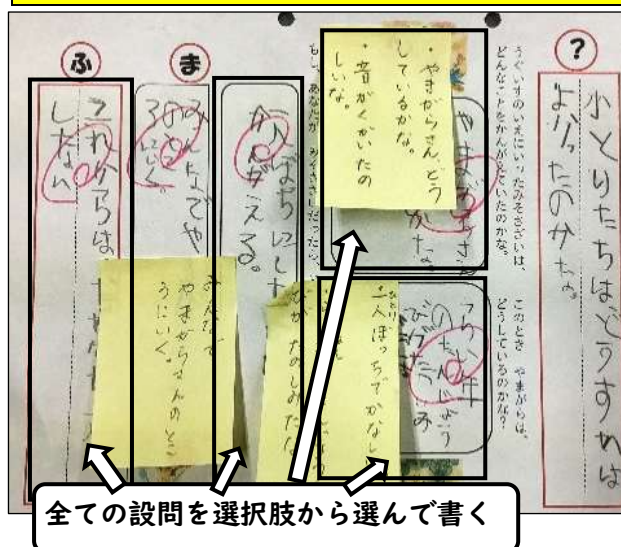
ステップ2では、選択肢を長文にし、（ ）抜きをなしにした。徐々に書く量を増やし、児童が「書く」という活動に慣れていけるようにした。また、選択肢を長文にし、詳しい理由なども問うようにしたが、ステップ1で意見をもつことが習慣となっているため、抵抗を感じることなく、授業に参加することができた。

ステップ3【数問選択肢から選んで書く】



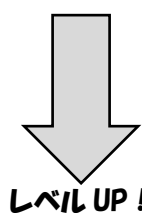
ステップ3では、「書き」の力をより高めていくことを狙い、読んで答える問いを少なくし、徐々に書いて答える問いの数を増やしていった。この時期になると、児童は、自分の考えをスムーズに選択できるようになっており、ワークシートに自分の意見を書いた後、友達と積極的に交流する姿が見られるようになった。

ステップ4【全ての設問を選択肢から選んで書く】



ステップ4では、全ての設問を書いて答える問いとした。児童への負担が急激に増えないよう選択肢を2つにすることで、読みへの負担を軽減させると共に、書く時間を確保するための支援とした。この時期には、児童は振り返りなどを自分の言葉で書けるようになってきており、選択肢の付箋が必要ない場合もあり、予め用意した選択肢(付箋)を提示しないことも多くあった。

スモールステップを意識した支援

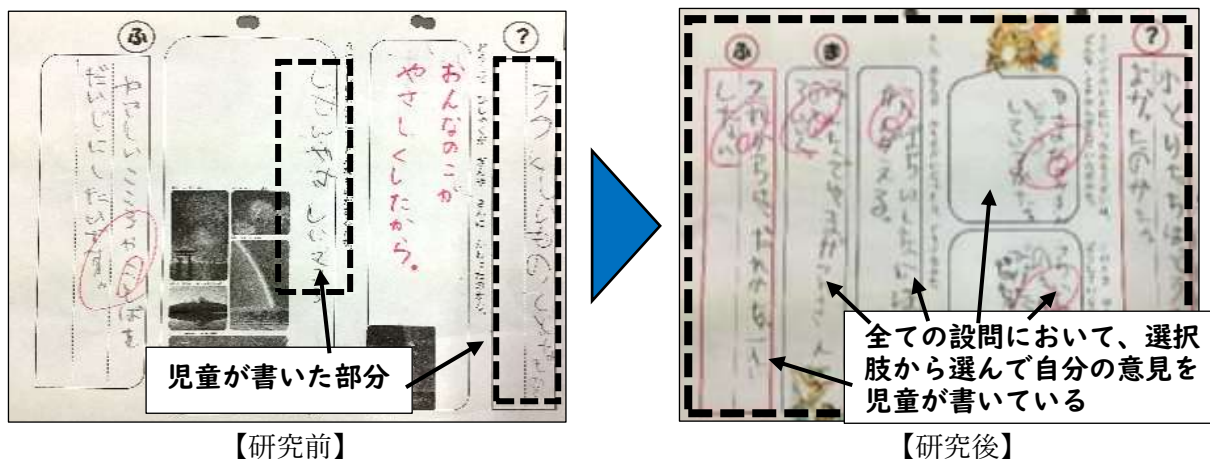


ステップ1	短文の選択肢・()抜き
ステップ2	長文の選択肢・()抜きなし
ステップ3	数問選択肢から選んで書く
ステップ4	全ての設問を選択肢から選んで書く

3 実践の成果

個々の児童の課題を適切に見取り、環境面(座席配慮)・教具面(ICT)・活動面(スモールステップ)の支援を行ってきた。特に、スモールステップを意識した指導過程を組み立てることで、児童に大きな負担を感じさせることなく、「できた」という感情をたくさん積み上げながら、書く力を高めることができた。以下に、研究前・研究後のA児のワークシートを示す。研究前は、文字が整わず、ほとんどの文字を教師が代わりに書いたり、ただ黒板を見ながら書き写していたりするもので、児童の意見が表れているとは言えなかった。研究後は、全ての設問に対する答えが、A児の文字で書かれていた。その答えも、選択肢の中から自分で選び考えたものであり、児童の意見が反映されているものになった。自

分の意見をワークシートに書けたことで、自信をもち、積極的に友達と意見交流を行ったり、発表をしたりする姿が増えた。



また、道徳科以外の他教科でも主体的に授業に参加し、意見交流をする姿が多く見られるようになった。道徳科で得た学びを他教科でも積極的に生かそうとする主体的態度を育むことができた。さらに、情緒面に課題を抱えるA児にとって、心の醸成を図る道徳の授業は、社会生活を営む上で欠かすことができないものである。「書き」の力が高まったことは、道徳科における学びだけに留まらず、学校生活全般に良い影響をもたらすものとなった。



【学活の授業で発表する A 児】



【落ち着いた学校生活】

4 普及させたい取組と期待される効果

「1 はじめに」でも述べたように、発達障害がある児童は増加傾向にあり、様々な理由で、「書き」に対して困難性を感じている児童も多い。本研究で行ってきた、環境面（座席配慮）・教具面（ICT）は、どの学級でもすぐに取り入れやすいものであり、教師への負担も少ないことから、長期的に取り組むことができる支援である。また、タブレットなどのICT機器を活用する経験を積むことで、児童が困った時に、自ら解決できるようになることが期待される。さらに、スモールステップを意識した指導過程は、道徳科に限らず、国語科などにも普及できる可能性があり、教科の垣根を越えて取り組むことができるものと考えられる。

5 課題及び今後の取組の方向

本実践で行ってきた支援は、「書き」の力を高めるために効果的であることが分かった。今後は、選択肢がなくても、児童が自分の考えをワークシートに書くことができるよう、ICT及びスモールステップを組み合わせながら、継続して研究していくことが必要である。また、道徳科に限らず、他教科においても普及させることができるかについても引き続き研究を行っていきたい。